

答案落第

太宰治

青空文庫

「小説修業に就いて語れ。」という出題は、私を困惑させた。就職試験を受けにいつて、小学校の算術の問題を提出されて、大いに狼狽している姿と似ている。円の面積を算出する公式も、鶴亀算の応用問題の式も、甚だ心もとなくいつそ代数でやればできるのだが、などと青息吐息の態^{てい}とやや似ている。

いろいろ複雑にくすぐったく、私は、恥ずかしい思いである。スタートラインに並んで、未だ^ま出発の合図のピストルの打ち鳴らされぬまえに飛び出し、審判の制止の声も耳にはいらず、懸命にはしつてはしつてついに百米^{メートル}、得意満面ゴールに飛び込み、さて写真班のフラッシュ待ちかまえ、にっと笑ってみるのだが、少

し様子がちがつて、一つの喝かつさい采もなし、満場の人、みな気の毒
 そうにその選手の顔を見ている。選手はじめて、はっとおのれの
 失敗に気づいて、恥ずかしいとも、くるしいとも、なんとも、ど
 うも話にならない。

ふたたび私は、すぐすぐ出発点に引返して、全身くたくたに疲
 れ、ぜいぜい荒い息を吐きながら、スタートラインに並んだ。フ
 ライニング犯した罰として、他の選手よりは一米うしろの地点か
 ら走らなければならぬ。「用意！」審判の冷酷の聲が、ふたた
 び発せられる。

私は、思いちがいでいた。このレエスは百米競争では、なか
 ったのだ。千米、五千米、いやいや、もつとながい大マラソンで

あつた。

勝ちたい。醜くあせつて全精力つかいはたして、こんなに疲れてしまっているが、けれども、私は選手だ。勝たなければ生きて行けない単純な選手だ。誰か、この見込みの少い選手のために、声援を与える高邁こうまいの士はいないか。

おとしあたり、私は私の生涯にプンクトを打った。死ぬと思っていた。信じていた。そうなければかなわぬ宿命を信じていた。自分の生涯を自分で予言した。神を冒したのである。

死ぬと思っていたのは、私だけではなかった。医者も、そう思っていた。家人も、そう思っていた。友人も、そう思っていた。

けれども、私は、死ななかった。私は神のよほどの寵児ちようじにち

がない。望んだ死は与えられず、そのかわり現世の厳肅な苦しみを与えられた。私は、めきめき太った。愛嬌あいきようもそつけもない、ただずんぐり大きい醜貌しゆうぼうの三十男にすぎなくなった。この男を神は、世の嘲笑ちようしやうと指弾と軽蔑けいべつと警戒と非難と蹂躪じゆうりと默殺の炎の中に投げ込んだ。男はその炎の中で、しばらくもそもそしていた。苦痛の叫びは、いよいよ世の嘲笑の声を大にするだけであろうから、男は、あらゆる表情と言葉を殺して、そうして、ただ、いも虫のように、もそもそしていた。おそろしいことには、男は、いよいよ丈夫になり、みじんも愛くるしさがなくなつた。

まじめ。へんに、まじめになつてしまった。そうして、ふたた

び出発点に立った。この選手には、見込みがある。競争は、マラソンである。百米、二百米の短距離レスでは、もう、この選手、全然見込みがない。足が重すぎる。見よ、かの鈍重、牛の如き風貌を。

変れば変るものである。五十米レスならば、まず今世紀、かれの記録を破るものはあるまい、とファン囁き、選手自身もひそかにそれを許していた、かの俊敏はやぶさの如き太宰治とやらいふ若い作家の、これが再生の姿であろうか。頭はわるし、文章は下手、学問は無し、すべてに無器用、熊の手さながら、おまけに醜貌、たった一つの取り柄は、からだの丈夫なところだけであつた。

案外、長生きするのではないか。

こんな、ばかばかしをしていたのでは、きりがない。何かひとつ、^み実になる話でもしようかね。実になる、ならない、もへんなもので、むかし発電機の発明をして得々としていたところ、一貴婦人から、けれども博士、その電気というものが起ったからって、それがどうなるのですの？ と質問され、博士大いに閉口して、奥さま、生れたばかりの赤ん坊に、おまえは何を建設するのだい？ と質問してみて下さい、と答えて逃げ去ったとかいう話があるけれども、何千万年まえの世界には、どんな動物がいたか、一億年のちにはこの世界はどんなになるか、そんな話は、いった

い実になるものかどうか。私は実になる話だと思っているが。

ヴァニティ。この強^{きようじん}韌^{じん}をあなどつてはいけない。虚栄は、

どこにでもいる。僧房の中にもいる。牢獄の中にもいる。墓地に
さえ在る。これを、見て見ぬふりをしては、いけない。はつきり
向き直つて、おのれのヴァニティと対談してみるがいい。私は、
人の虚栄を非難しようとは思っていない。ただ、おのれのヴァニ
ティを鏡にうつしてよく見ろ、というのである。見た、結果はむ
りに人に語らずともよい。語る必要はない。しかし、いちどは、
はつきり、合せ鏡して見とどけて置く必要は、ある。いちど見た
人は、その人は、思案深くなるだろう。謙譲になるだろう。神の
問題を考えるようになるだろう。

重ねていう。私は、ヴァニティを悪いものだとは言っていない。それは或る場合、生活意慾と結びつく。高いリアリティとも結びつく。愛情とさえ結びつく。私は、多くの思想家たちが、信仰や宗教を説いても、その一步手前の現世のヴァニティに莫^ば迦^か正直に触れていないことを不思議がっているだけである。パスカルは、少々。

ヴァニティは、あわれなものである。なつかしいものである。それだけ、閉口なものである。

ながいことである。大マラソンである。いますぐいちどに、すべて問題を解決しようと思うな。ゆっくりかまえて、一日一日を、せめて悔いなく送りたいまえ。幸福は、三年おくれて来る、とか。

青空文庫情報

底本：「もの思う葦」新潮文庫、新潮社

1980（昭和55）年9月25日発行

1998（平成10）年10月15日39刷

入力：蔣龍

校正：今井忠夫

2004年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

答案落第

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>